

梅毒や破傷風治療 かつてヒ素利用も

Q 二十六歳、大学院生。ヒ素中毒が話題になっていますが、漢方ではヒ素も薬として使ったことがあると聞きましたが、本当ですか。

ある。江戸時代には化毒丸（げどくがん）という雄黄を含む五種類の生薬からつくられた丸薬があり、梅毒の治療薬として内服されたこともある。このほかにも、ジフテリアや破傷風の治療薬として処方していたという記載がある。

A 漢方医学では植物性のものだけでなく動物性や鉱物性のものも生薬として利用している。ヒ素は紀元一世紀ころに編さんされたとされる最古の漢方薬物書『神農本草経（しんのうほんぞうきよう）』に雄黄（ゆうおう）・雌黄（しおう）の名で記載されている。天然に産するヒ素の硫化鉱物である。

ヨーロッパでもギリシャ時代からヒ素は毒物として認識されている。一方、北里柴三郎の直弟子・秦佐八郎はエーリリツヒとともにサルバルサンという有機ヒ素化合物の合成に成功し化学療法剤の道を開いた。「毒をもって毒を制す」という、毒を薬に変える発想は昔も今もあり、その意味で薬と毒は常に紙一重である。

肛門（こうもん）のただれなどに雄黄を火であぶってでた煙で燻蒸すると治るなどの記載が

しかし今日の漢方処方にヒ素を含むものはなく、治療目的としてヒ素を利用することは、漢方医学にも西洋医学にも現在は存在しない。